

信じる

in the shade of family tree

木陰の物語

団 士郎



随分前、誰かに聞いた話だから正確ではない。

父親と娘がレジャーボートで海釣りに出た。



天気良かったので、つい調子に乗ってしまった。



気がつく、予想外に沖に出てしまっていた。



釣りは堪能したので、戻ろうとエンジンをかけた。



動かなかった。何度も何度も起動させようとしたがエンジンの反応がなかった。

不安げな娘の顔を見て



と声をかけた。

大丈夫だ。お父さんがなんとかなるから!

思案していた。

ボートは流されている。



来慣れた海だから陸がどの方向にあるか、どちらに流されているか、見当はついていない。

まだ夕方だが、そのうち暗くなる。



小さなボートだから、救助を求める手段もない。

彼は決心をして、娘にこう言った。



助けを呼びたお父さんは陸に向かって泳ぐ

「必ずお前を迎えに戻ってくるから。心配は要らない。波も穏やかだから、この船は安全だ。静かに待っていて下さい!」



そう言っ父親は船を離れて泳いだ。

泳力にも体力にも自信があったので、不安はなかった。

ただ、一人で海の上で待つ娘のことを案じながら泳いだ。



海岸に泳ぎ着くのに、潮の流れのせいで思いがけず時間がかかった。

結局、捜索活動は夜が明けてからになった。



予想以上に流されたボートだったが、父親の情報が正確だったので、午前中に発見された。

救助された娘に、多くの人が口々に「よかったろう。よく頑張ったね」と声をかけた。



しかし彼女は、「ちっとも心配なんかしてなかったよ。静かにしていたら、必ずお父さんは迎えに来ると言ったから!」と答えた。

でも、信じられないから不安になる。

信じたければ、誰もが思う。

それを聞いて皆、驚きの声をあげた。



真つ暗な夜の大海原で、波の音だけを聞きながら、信じて待てる心を持った娘に感動していた。



「何を信じたらいいのか!」なんてつぶやきをよく聞く。

自分を感じる、誰かを信じる、明日を信じる、未来を信じる。

あらためて、信用できる、できないは、相手によるのではなく、自分のことなのかと思う。



人を信じる能力もまた、日常の育ちの中で、育まれるものなのだろう。

言葉は簡単だが、そのような自分であるためには何が必要なのだろう。

